

古今著聞集 十五（元禄三年版）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

古今著聞集

十一



宿執才二十三

古今著聞集卷之十五

省執者天性之死滌善也文武以小諸雜
藝稟其道思其名之者雖晚老雖奇捐人
臂省癖不移欲罷是又前業之令與欲
以別之手の半ゆきまきんを陽後より義る
多才而極能之

あびくつりうきつりせれたりあじきのねりのねり
難のかねども何のゆゑかやうされどあまびえ
まづくともせき一めぐらすが作させられ助佐の

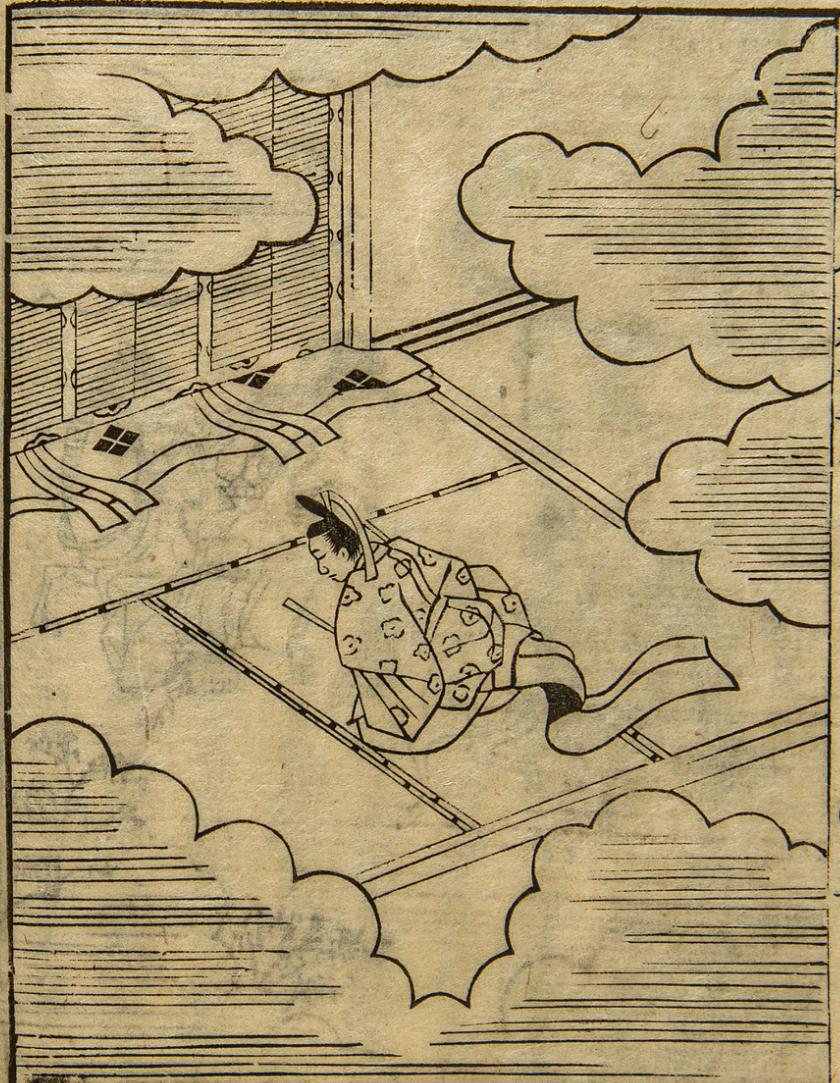
ゆく所あやせぐひごく傍あぢ食ふべと仰れ
さり助おのぶて、獨て近めづからへばあめてやがくめ
かじてのうせてぐらも自に加く尾速の種こ
あいく揚あらふを極ごくて陽ひよ門もんのみぞうがあたご
里さとをるに穿うの木きのうじでつるぎに前まへとけ
旅たく詠えみたり縁えどばねねかくねる種くが
見みだす爲ためといふに高たかきよも寛ひろきのうえ
ききればあざりのつまご鳳きりうるにげ度とき難むずく
あく悔くわいく廻まわてうよに三さん病びやくのまへて種く
武たけとも緒はじくとくらやでぐらはつぶら二人

かゞく因いん付つけふ延のびよきりかきのすへじ車くるづき
の冒ぼう起おきみゆくつうとひきりぬぬくねぞかく
つまつまには神かみのあまされはるるは室廣むろひろの正社まつしゃ
背せきと蹊いりと廻まわる食く殺ころもあな死し剣けん坂さか成な神じん
三さんくめあるあやとお待ちまちてこそ
嘉保二年八月六日因いん縫ぬいれり華はなびりて縫ぬいる事こと
秦せん近ちか事ことと下野しもつけ助すけ兵ひょうとづひくら近ちかまへは當あす
事こととて鞍くら鞆くらの事こととて入い助すけ友ともいは室むろふひら
さきまほの傷きずめりのあらんとよめよして義ぎ花はな
傷きずのりゆくじくひくやさり義ぎ花はなのいとれ



今度かねゆうらて云うのとやうよけでいえ
とやめふあうとひざびとひざひれど
助がへでうちておゆくのりをまへておゆ
せきうも自なむおおく敵であつておゆ
助がへにわくと拂きるにゆきとあして
おゆきゆがふ城とあがむれに助がへあす
てあづておゆきり金たくとも金くと純^{きん}がふ
とくおゆきり拂^すき助^すきうよ^うで西^に
あゆきり拂^すきの因^いに^いておゆりけるみや^い
くのとおゆきりのゆきかねおゆきする

て助金うる迎まよおひつゞぐの百姓をへぬ
羨保は後の難ひじだるの祀しとも助金うる迎まよ
又そくやうされば助金うる迎まよてと
近まよくよあやまてくあやめくびく
平ひらき代きようじうをすすせせよよう
りこちくきく間まのまかかのの人じはは事ことのの所しょ
ああううそそのの間まががれれをを見みととぞぞ見みたた
太お多た少す年とめめ、すくすく仕さかかくくくくをを暮むくく
山さん千せん石せきかかるるかか



法苑理をもとまで極あよ傍へて下りて一人の
差しよりてうつ没後よりの墓あよ東じに墳を
立つじまきしてうがりぎの改葬しても墓を
變せんとすこすく附む於理のまきとすがり
たり至生の時より既一あれをかよ没後もち
なまめひととあくねくとあつきて既のあゆ
みの生れをとふとあくねくとあつきて既のあゆ
同西塔の傍あくねげ室へきり仰一足ハセヒ自
じてよみくらとぞもれぬとくとよき寄とく
僧をたりそも毎年法苑理が海にて既の

きるる紀伊高見山ぶりうて帝へてうきるあ
至人ハリニモして法苑理をじまゆのえきり「那
儻既りてゆのあくねあや一くやく御ふち
経度つるよ年序つる白骨わりきふか教せば
一くや新これつてきゆりきの齋齋比サカ前さ
前あつまく齋齋小向くも因縁とゆきれど
前あつまくりく我はれ齋山の傍あくねが多
りひき陸のうじ山よ近うて文七とある
法苑理高見郊と傳あんと承とむて生
成ハサゲルとつるふアドヤガラ海小島で川

とつたを承と涌満せんぐてえよむ編
今年もまだまのとつても胸に兜率因
み生じるといひのまく腰に身とせれ礼
とおへうつめうかのぼくのまな一箇
靈氣と化ふとくの止りびよせんの涌満の
鬱鬱あさり一そくとあわす風紙の下に人
のよへ着草の紙かひねく立ふよあらび無
ふうに執へそうおき事あ
雲霧むぎのゆくへる余みをゆりひあつさり
さどこの附方承あ代當のくに候嘆ひよつる經

遷化へたりやれと宿紙のうゑゆりへ
白のひの山附時嘗成後して豈意二郎丸
ふぞ國御兵利ホの秘事一とくにて秘室
玉きぬの財貨舟と解一アて歎へるうる
齒附へそく成人の後ハ正業にあら称ばれ
秘とくにば世のよき道のよき渡遼のりやみに
ゆそつあらうけどられゆりて云氣へよろ
づくふくうりと後則季と先して多湯宿れた
のまひの秘したてほんがほく作とせれ
勅小魚とあもくをさげとざうをふうえ

つきて御簾利とつてうりひとひてへそ壁
屏へひくとひくとひくとひくとひくとひくと
うみく院ひやきれを執定ひけ半力ひぐだく半
えもく二而丸がまの時小半切よきやぶ小祕を
きび一そ道ひもひあわれとぞ作しきあ祕よ
あひひひドニ半とぞあらくおらりねきば
念ひうひ一ヌマツ秘ひうそつめぬりとゆを
かゆを鶴の房瓶ひうひゆやあらうれ別
あぢまへ花深びひひでとへ寛後の内附えとづ
ひふ事ひうあひにうさとうれと信臘の暗

則季候くめんゆうまれく庄氣ふほきくきくち
く後三席丸が密さうとひやうくううとぞとれり
あれハ尙耆嘔よからくうてみきうるてまく
彼の秘リセシくらしときうとくらすのトと
すにて財資グ先年のかまふじかくくは
ねうかひくやうとぞ作すとふくろとほハ優別
貴清秀吉と少虎基政とお清方とのく
華成碧うせきり少虎とお清秀とつとせ清玉
とかうりせれど一年半とくわらくとくとく
ゆう起居と書て後一きりる事とば附空

今ア後より人並んとのひきわべはえひさびとく
きりきばりうくやかくそまきう入滅の時も被風
あてゆのくニ被風カクフウ以小難翁小遷化スケイ一作う
保延年中より守後モウセイ在天台テントウの庵寺アーランに
あたねめてあひあくびらひもう翁よに平定年月
廿八日小在天台モウセイを移り一移ひねめて年月ツヨウとも一ぎれ
保元の乱モウセンでこそ移りくさがりきればな天台の
世セを離ハシマリえいと因ウチ生スルてから一せぬうり移すつ又移て
あつみてあやうく在モウセイを移り保元年七月十八日
があら終ハシマリ著ゲハシマリ挂ハシマリ小口コウアラ清キラひ多々タダタダに墨モク深タマ裏ミヅシ

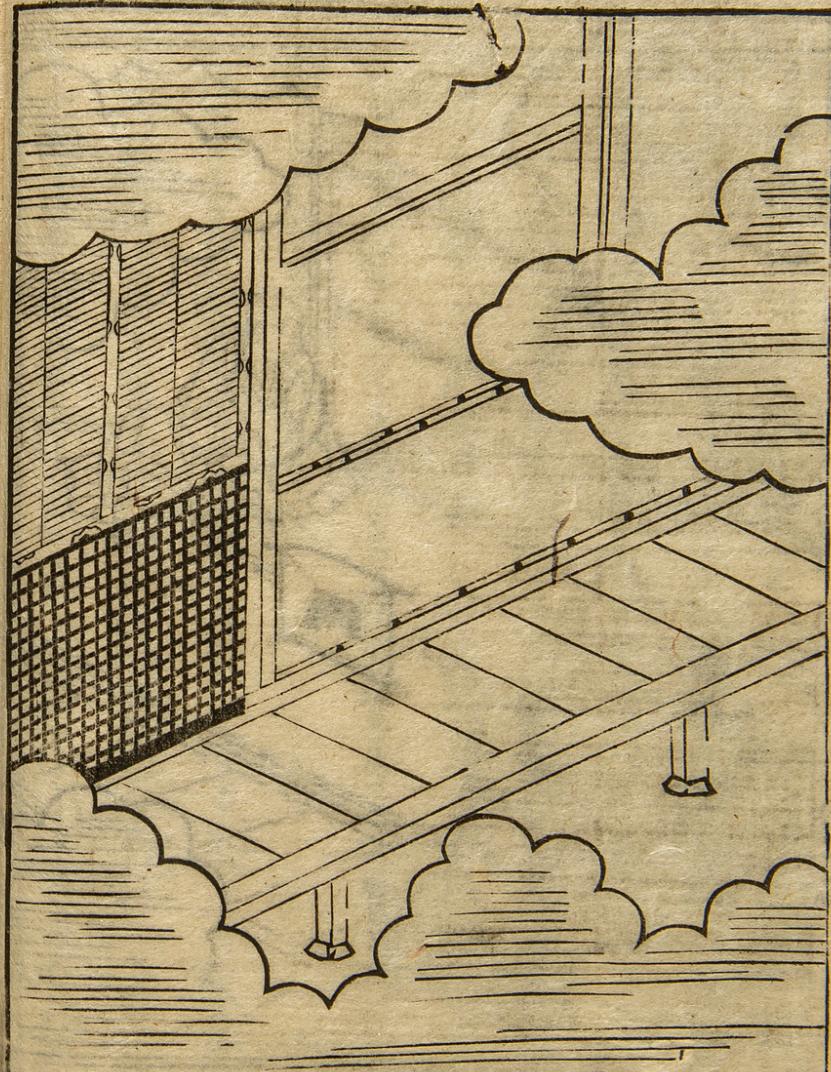
之シテはと見候モウセイうきうし翁モウセイ人モウセイ位モウセイ一人モウセイ僕モウセイ人モウセイ山車モウセイ
の三モウセイ（ふくらみりきうち極モウセイ左府モウセイの左の三モウセイのよけ
ありをくらむれ大炊カク古モウ門モウ左府モウセイの左のよけもてあく
向モウセイきろうとて中院モウセイ左府モウセイへと無事モウシヤウ無モウひきの見モウ深モウ
あるぐまれたちのたぬゆくひくおきらびより
ほしおか翁モウセイハ病モウセイよ志モウセイ川モウそのうモウお家モウセイしてのたれモウ
キモウあとモウあとモウあとモウだりそれうモウへおきモウめの病モウセイ
おモウかうしげ病モウセイくかくモウくらりモウまの小猿モウ翁モウセイよと
ゑモウあらんすモウおうひ取モウ（あれど万モウ）一モウ度モウ今
ひまて候モウがまねモウあがモウ一モウこやまモウさればおれ執モウ酒モウ



ましめゆと右肩の念がひくつて落とせばたぬ
右ふさうみてぬく乳若あつてう係大頭云中ね
やくぢにさきう門のむかと送りやうれりう卒
ニふぞぬめのあらび左肩の念へ花蘭れを官の湯
ゆづりやてち府の道代えくたわよぬ宿ひじふ
もうみきとよどくあうてそひやうふくす
あくねふみぐれに車く

仁平三年の春より考究へたま病と更ゝうやうに
次の年正月十一日小姓もばへた後事すねゆわめてお
内あるがどかひの為小姓あくまうせぬ

ナツタクニモ情痴病伏ゆきのくちにらづてあがめ
らば、苦痛をうくゆね、一ニテアリモレバ、吟人を若
て、翁徳ふきうれしも、酒巻は琵琶と隊、歌の事り
落葉人歌、あふおりどぞ、りきうや、るまみそ、かる
魚、うつて、おひよぎり、あむれ小豆ニ、けり、あむれ
へ、あむれを後、かまく、とまく、の念、かみく、はーそ、ヤ
だまく、に、有無よひれ、く、金、かね、く、ざう、きる、も
わうふ、けられ、象徳大おもての、かの、うる、の、足、ま、ハ
人の、こ、う、く、つ、ある、と、て、の、う、ぎ、あ、然、く、と、あ、小、あ、
て、あ、あ、ば、う、ざ、と、じ、一、草、野、び、ざ、た、す、と、き、原



て後事ぐ當城とくぐくまの半ととぞなり
應保二年正月小笠原同月同日廿一八十六日
うを爲ひみもりと後二重院の附のちとの化り
落して舊續の統とゆき経の勅向まざりにい
ふやわづかとがく養せきをきりさるがやど
雲は小はたれの山消息あり宗備と書れりう
卫失ゆ人へいたとあやしくてひよそて山深れ
バその山深く道伏りとがく養せきをきりさ
れしむれとせきぬりさりたどろきあはれて山深
内もては鶴小ヤゆひりすりれりうび

ふらさうと養せきをきり世滅て生滅く
然と身の難んやくりさんとせきもつもあ
ねりえなき

養せきをゆきせんと一山養せきをきり後う
據て山のよきをきる養せきをきり身
のうせきをゆき後うく折りまざる財の財
くくはくくあはきをきりまづくくに山華
をもととさくらうやう擣て氣うき養せきの
四じもよび度とてくまのせきをきり根ある
根ある阿くその山華のありゆくやのくの根

富恵はひつあはるやねにわいにやうかへばそ
あひのうかへばとよもへせんは事のとものゆゑ
へあくねよとがく

大監物奉原の守老の僚多生の中の多參の老
あてさんむらるお庭の年かじこ藩^{さつま}の主内^{しゆ}の内
だりてぬふへどアキラギテ年ある二年主病と
うけく日付あやめをあづかへてかくとせた例の
宿かわかづきうちきひへ八月いせんよ上原^{じょうはら}へ新居
小舎のトトとおもてうきうきして考え御^ごきれども
おきあてのゲツ^月八月七日宿^{すく}換^{かわ}へお彼の久

にとくじゆみのうのとくね牛^{うし}と云て廟^{びょう}の小あつて^て
よ裏^{うし}座^ざとありあればどひあはきうよ^よともとゆう代道
とゆを病よつれてう坐め^{すわ}てうだりてうだり
もあくとて出かざるいたわのかうりきんあひのむりをす
富恵はひんくあくれて

爰^{すなは}た西^に云^い實^{じつ}をあ承^{うけ}元^{もと}年^{とし}かきあうべあへ
あゆ^ゆづ清^{きよ}暑^よ嘗^なの山^{さん}社^{しゃ}系^{けい}小^こ中^{なか}宿^{すく}すみりあゆ
えふと子息二人の肩^{かた}からうとくとくと高^{たか}きえふをす
後^{あと}ひとじさつくおれようれど八葉おゆのひす
大^{だい}豪^ご庵^{あん}の所^{ところ}すみてあへきる人^{ひと}とくら

ありてうそとて大納言のつまひをかへりてやまき
あらへ故内府は信濃守の内侍のまぬすで
こそとくにてふまゆに定後もむほげばすら
二度の御猶みどとるつてゆくとてそれ
ヒヤムのうえやくべのたののたるをよろびる
ふ官途のわづがむすとへかはめりても御萬
千のて代批一あゆきうてそぞれが家後
あをなねの詔あつて四年正月三百を
まのよきり通の御ひづみすらすや

より法師をもつてまくは体たるもの在居のあ

より行うきりぬ年月の後、ゆりて年は登
き出でありまじむ川井、した後、宿等の
ゆのせんじてうとまそ、中門不うと西院殿へあらが
高麗のじゆかやうとまそをきりあやへて、人
爲ふれはれへびとてとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とおひまで若松山へりぬうかへばれが花くあら
うの松林よりはのこるわきのくふくを海の
風波極くからんかまつるやまへてほゆて雲
きのほれびへかわづきうかとひくたなびく孫
のやうにまよひうきればやねひうのうへかくやう
ききうにありてか者のかくじとやまればやう
見をまよひうと母小夜歌とく城の上ふくば
のがせくわく今のかしわれる日やうとまよ
きれどありもしゆうねを後てふと美く歌織くさう
ゆき歌よほとほとまよとゆくうめくらへじよみゆ

ぬあづきによあづりぬへうきうてはくはくはくはくはくはく
鈴とまことちよけをきうあトハスナシタホ宗
御と推舉わうせばあ窮大ふけすまうぎてゆえ
あう紙ありまくつもく津おのくせに湯でそのせ
ぬうそと人よあそられまへあだまく世とのがれ
んびくさんをくわせんとやねまく被よここもゑがれ
たむ見事とまくわざをもあらむとやせくとお
みのあうそと人よあそられまへあだまく世とのがれ
を承とげく後ねまくふだくと着くわざがり
あらぬとまくとてゆうねほとほとほとほとほとほとほと

ごく富士山の御事無事には捕まつねり
ミ鷹飛り才と中野の川をへ廻りてりやう
がくはまをさかたあくに廻るに若狭よりされ
スカマおとふ一年いひひとゑつさうに恩宗
の附あへやづらとせすれどもさばじげん
かくおりきりとてもほのむづびなづくふやう
世のぐれあはれてこれもあはれのたゞ一
かくじゆめく一ぢきく

かくの信頼とまへまきう法小船かく
とまくすかよどみとさざなぎさくのくら

佐房の天井のうへおひらひまかくしてあらわの面
皆へこうひこうやどものひまほさん怖畏とお
あづへまく入出でめくへとぬきだまつてまづへ
懇懃の意かうてもとお見思やおまんじどもひ
きる極とくまくとててもおのへ解し解せば
くらむとくま

孝道ねとまくわくとく解いても病とま事かほ
うかくとく教と送きうなせよ大事かかく飲食
もあたててお令わがまへとくとくればまほ食たふ
やうやうせ捨ての病席おもへずてお勞だや

今をあらはれば未過たりとてかまへず
ハテて痛石もうじえふるるもひりびりて
山火のいざくさで日教つゝむわるる云
かかくおよへまむとやまとばあへんと
トてゆのまの病にてあへつきづきすけづ
とかじへも成あべ怪かねくにむけよの風く
まされし御伝の流の略本と莫アんじるもそれハ済
うまくねばぐれ我そんあふくねくアマテア
くらんとせあこせもて飯とあづきか一とくめ
えを落ふくらくおのくぎつまればとくとくとく

ウリてウセ落ちうゆとて道絆かづくせんめいの
まことあまくおもん半へ口筋をぬ一これバ南え譜
序かと物の秘焉要教極徳徳義育以希見重教
徳人傳と傳そくさりたれ世事小如くより道
やく風く遠ざくあらうよ様りとそもく思
え半かれ大ひびてよアホ一後も前だハうのじよ
い現也あらうとまくく既ようが純セミセミアリ
かふきう討者道翁トカウメシムヒヤウシロヘ恩ハ
あらうて君の山比巴ハ妻妻キト一トキアフノ折
あゲーらやくちろれ御を落ふとづかみ

おもひふりれすがまう列の御とう傳えど
へそりくせの肉厚とそアホのゆゑにあわしがれ
バ彦ひやまくらむるゆき室浦の北巴へお説を
かき捨合アしてお酒を流せんと入船の家に男
て蟹の流とつてゐる人ありぬを流なあたどさうあ
させぬくじ一今そんぞくその閑度をあれ
ゼ船の通路とゆくて蟹流と次よとせはれ
あをぐらく内船のさかくひをねたうのでの歌
玉ハ蟹流くらわむおえようこれいまだれど餘
盐ハあ流まで月がくら入船よわうてかくあら

おもひふりれすがまう列の御とう傳えど
あれバ因厚あひやうと養ードされおぞりを下り
て空捕の爲わくあて舟を下に付傳授まくに
さくゆふをとほくつまくまくとあてられ
やうへ船うれとまくせて空写瓶の財ふくうあ
あくまねめくまえういこねぐく金錢めくにと
あくま年來あなたざか船に付あくせあく年來く
生處れくまく半はくの船の物語何よりみみねば
まくへ室うりうりとまくに空捕と見漏せし代りに
まくくやまくわくじい半はくの船あくよみ

がんりうとお玄博によきくせぬやうみられ
ぬめんがくとだどかづきてもあらひす
は原野生ひ三十れ年うる熊野へ駈てく我ら若
えの草小ぢうてばまゆに食とめずべとぞ
しれきおきのむのひの神トトロふくあひくみりの蘿索
うロトトロかくしていぬべとぞ嫡女者孫士業トトロ
ああにぬらうめていのまほをびととあらえ
とて西都の御琵琶ヒラバとあかしてくやくぬのう城
をやそく比巴ヒハかくばとくゆすけとととぞ
カクトトロあきくばほなまくふわさゆへさげ
とゆらうとよそれハうきくへゆきあつまくまくお
ぎしろせり下向のほえとがくまよへほ事代
アツミとよれくにじ比巴ヒハとくくひくせくをぬ
とくアツミとよれくじとまがくわられそん
あくゆくとわ琵琶ヒラバとあくくばほくそち
くふくくらばトトロかくとくまくとくまくとく
まくのくへわくわくとくまくとくまくとく
ぬくらうれきくす)

りれもか金露カスミは橘カスミとつす者まくらう鞠マツコ筆

ひきりうとりや」にまつてゐくらむすがふ
食の所景もありてどんに食後の物かくも
持ひ考る御のゆゑに便ふとやつてつひくらへ事
たすかよかく食且書に今つまつあかへてよ
みぢ屋とくやのうどゆくろもんやとく
されど考る御判事へねそう翁而してお宿
魚りて魚りてやほづく方秋水の序のせが
ゆくじゆふを發信へと大団ぐへ出発也
朝は仕合とひされば別段起づて出く
激ぎて身をとく病者と曰く古知識の前より巣

代よりて大較のうがふれりてく漁師のうつて牢
うそり極利物うそりわうれかうらうり
落玉の序ハ第ニゆくむ縦筆へ大作甚歎うの
典代物傳へくハ子孫ので一承ぬりのハあれと
ゆふを基實大富貴を實實は少くお鷹一矢り
きりのうな裏がとく御つてあるゆと
あれど重寶ひとく御つて後ち羽代のゆゑに
は舟よがまそへ嫁へお鷹へて吹きよ匂宣と
きて、さりかく御ア、匂宣が子を墓に仰ぐ
後又重慶へせにあればお墓ま限ふく仰り等

ふる年のかり生身にせん席シテリとて變つた
つたとさへシテアハタレバ高臺主服のああシテ嚴
室の神ミカミすれ度シテアハくほシテアタうと深
大納戸奥に別アリ室ムロ御殿マツダといひてウラセヒ
せしもせり既アリ又アリ參下シマフるうへあ附
主耶シマフうす可シリシのまこと神ミカミよ下シマフセ
きシマフ可シリと高臺タカツモと云ハシマフとけい
候シマフ一シマフの事ハシマフと云ハシマフ事ハシマフとけい
主耶シマフのあめシマフて行ハシマフ御殿マツダのあこシマフわまごうの
ゆシマフかどシマフて侍ハシマフるうシマフ例シマフと想シマフふとばれ

バ至シマフ人ハシマフからてば重シマフ參シマフせりシマフが様
爰シマフ事ハシマフと云ハシマフてあとシマフ仰ハシマフすシマフナシマフの神
半シマフとおもシマフうシマフ、半シマフと恐シマフうシマフ、今シマフ參シマフ序
あシマフるシマフよシマフと作シマフきシマフねシマフとシマフぬシマフとシマフね
高臺タカツモやシマフ御殿マツダアシヒシマフアシヒシマフとシマフ神ミカミ主服
れシマフのまシマフ先シマフと取シマフ一シマフ舉ハシマフ進シマフ今シマフとシマフみけりシマフなシマフく
あシマフりシマフあシマフよシマフたシマフ佐シマフお監シマフすシマフのがうにシマフ
めシマフてシマフたシマフまシマフ

前シマフ中シマフ納シマフ言シマフ室シマフ御殿マツダのシマフを犯シマフふとシマフまう
きシマフバ寛シマフ元シマフ年シマフの脱履シマフのシマフと先シマフより他洞シマフ

執權とゆく所は法席のまゝある所より
のちの座もやけん遠もえ年の法事も室大
納ものじゝれぬの處よ山店と魚つまみの
二年八月十九日承かひづく海のく院後政前
後政ねあぐへあれどもとて白主とつやまん
せうしてよめ作しきをれど切よしのうには
よきて四十方のわくときの所まで承よへく
うら成あうてうちて宿泊ふりておもてたる
ノはくりある。

延長廿二年丙午四十三仲秋八月三五日

夜出依塵入佛乃威房内催独吟が形而已

新發嘉定

宿乃祖紀恩依宿葉家草庵書石あ承以
勒玉多日志情鳥見併一家孤晚辭東流紅
塵晴秋過西山白月因登高流零陰賛落
因花勢盛覩心蓮也寃血相逢名夜消節
先生掛发年陶令亮ら、歸休至秋四十三
曾祖令透照仕朝端何不耻信八月十四日
景氣達流自然終所

承家山あいじよめよのと

つうわう道ハ月そくもくね
後事の通のみくらばかこそあく
おのめへとてあくほんとせん
應てせりあくびんとまくわじへくぐだす
まことせりも寛の月日とあくど陶令が齡と日算
とくさくはくのくうりとて言ふきやうにとせのん
ゆきよひまくだりかくとみ詮能なむのく
うもあつと與る事

宿狹平

關寧 オホニ

關寧トウシナノ起自ヨリ及大ミツタ應帝ヨウテ雄ヒク久ク死マツル九クル
血クモリ皆モ寧ヒシ心ハラ能ハセバ小コトニ念メシ勿ハシマ致シテ舊カタニ來キム然シテ可ハシマ精シテ
主ミく惣サシ而アリ先サシケン賢ケン而アリ後ハシマ無ハシマ誠ハシマ何ハシマ

保元六年夏の法源ハシマの備文ハシマ通推ハシマ判ハシマりとくひ
伏ハシマて備ハシマらるハシマれかくハシマう第ハシマ方ハシマ生ハシマ源ハシマ義ハシマ賢ハシマ推ハシマ則ハシマ
とくハシマめを務ハシマめ義賢ハシマ犯ハシマ人ハシマと爲ハシマめをあるハシマうこ
出ハシマあく義賢ハシマ犯ハシマ刀ハシマのもとハシマさきあざり入ハシマ能ハシマい
とくハシマれ大ハシマ小ハシマ伏ハシマせハシマうとくハシマいあざり本ハシマあハシマ利ハシマ
切ハシマめをうとくハシマうとくハシマがたハシマく

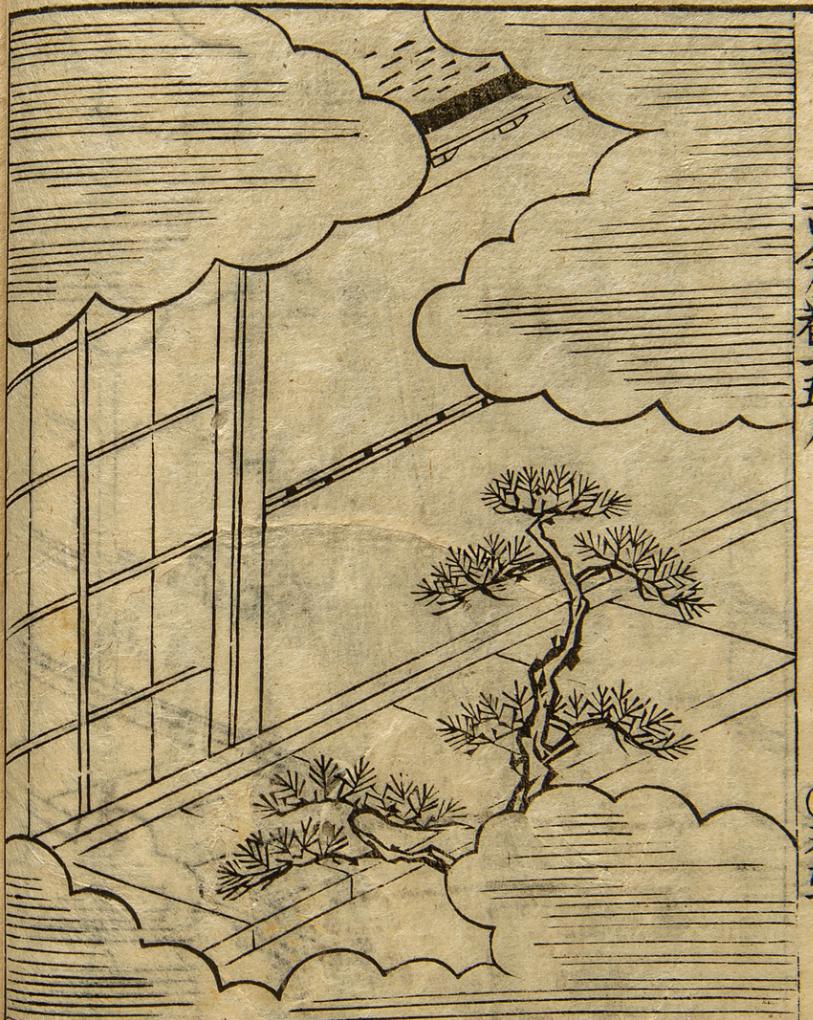
仁平元年九月七日笠翁の音入通とあ洞院にて
右官内侍御者二人がそのするむかふもしくあさゆ
御内侍にまわるやうにほめた近府生
奏ひまつて御内侍のくをえきりまつて人を扁冠者
とへりめで今一人はそりて三扁冠者
取とゆくをりをあらんやうきりとのとばとお
けりきり三扁冠者を力集め立て三扁冠者より
のあひとばはきてきりつれく迎えりきりを三春
がたくまかめゑ内侍人とくに侍者一人がたく

若者一人をばと称りかみめてきりア人をばなまの巻長
奉の意法下人をめぞりもまへテ久美尉持義
グ而位のよしをあせれ西とは皇室文代也源
有治大前位加名利也あざりて後那邊役で際
氣丸をそくりせられば社を入る御の御口よむぢら
きたりかりぎりせられば社を入る御の御口よむぢら
ねのよそくへりりされよき事件の於人宣人檢非邊
使賀おみあびくざり至詔ハキシケ前駆モアセ
國事より下社アカリ西詔ハキシケ前駆モアセ
とやのく恐れりておゆりにうりは船人舟人舟形

と紅條レバぬくれ流リュウ小雀コノハシアツミアツミアラグアラグクナホ指スルて那ナべ
名メイテアツセアツセル者モノアヘテ猿カニ暴ハタハタどもモリカヘテアホアホハト
ナシナシハ因後イハシの後アフタヒメテ佐サキナミミヒタチヒタチウマの馬
足アシを力アシ織ツル春ハトタケタケアシアシびくざりビクザリ西ニシ歌カばえハの
さきサキアヘバアヘバのそられソラレてら傳ラヂふぐまれフグマレなり
辭ハシ嘆ハシ法ハシ奈ハシれハシまハシ允ハシみハシギハシヤハシやハシゆハシ義ハシ法ハシ津
よヨけヨかヨげヨヌヨ男ヨあヨきヨり義ヨ討ヨトヨもヨ阿ヨハヨねヨ小ヨ冠ヨとヨ西ヨ
とヨうヨしヨきヨ紅ヨ不ヨ備ヨトヨアヨドヨアヨヒヨ冠ヨてヨ考ヨ
アヨ色ヨその下ヨアヨツヨアヨギヨり酒ヨはヨミヨアヨリヨアヨリヨがヨき
アヨモヨハヨモヨシヨアヨリヨきヨるにヨ出ヨるヨアヨウヨムヨアヨリヨ



さへと身を離れて敵よ手づくえ刀でうひ
ゑて手も力のあ男と親をてうふまで刀は
うほてと院からやうとあはりいきあせん
先まぐ後でうねかくえがときうてみぬれこれど
小ぬれは寝ざひの湯おゆより度たまめらす痛いた
きて必死ひじきにこゑの跡あとふゆが余のこりましん宿すく後
に泥なづつうりてうねせとまくてもりりねえ
法ほう下げ前まへよひてかゆまくそひつれとて事こと終まつる
始はじめりてゆきふれりく死死めりゆくぢ
き心こころの若わどか歎かなの男ひつら東とう太おかねふえ



人ふむらづれつまうさごはれ冠とくたよえて
つこひのうへうめくもひばりてふかわふ
せとねくからびとくらへばよ寄せんねばうがう
ドムシムダリしてゆきよきる月のかうれ志の是
はは假うやうは男じるはくひくにてあむ宿を文
の手にりてひきのんあかゆわすりとはく傳
院ふううされねうりうはくらくの私く命をば因
まつてかくてもわありき故無歌されどもくら
も志はくとまきぬとくまくらくすてうそり
かくゆううれしめぬくらううううううううううう
てまくのうとくとくせざりさりとくはくはく
そあ事ともとだりゆくはふくせくするゆくとくとく
れくろんと害す殺す殺すハげやうとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
めくらばそりてまくせりあくらふくらふくらふくら
かくのう

かくのうの右肩の年年は貯納り大名たとありてを
ゆふくらの不義村とよくうきよくうきよくうきよく
の度とふくありてはすまのくら圓錠ありてをきる
のくらばくらふくらふくらふくらふくらふくらふくら

度とせめうる義ねがむよ小糸へうる美村をうる
立とそりてひきとくの御ひての御えと下緒のね
ぬと紙をねどもとらへりきりに鳳綱をうる
氣えりてえあへ三浦がハ友代からとまち
たり纏國な事づ合戦の時の車くるまとひくつくわす
ゆあらわへどひくさぎり

天福元年祇管を十列よ院のひる曹日暮そのひぐれ久流くりゅう也れ假
空うつせせうりきるト車くるまふすて御ごくら
ひらきるに大兵の難まづえち府ふ生ま參さん也よく
車くるまふのひくえんえんくら行ゆきくとくとくかよひくはふさんく

ふうきくさうきはすううきくさればりはとす
西にしのきくらればくはとくはとくはとくはとく
うきうきさばりあてこくいふくもほがなう
べうきうきもねばなりひしけねぬりのりてれや
くう無むりてこくはくはくはくはくはくはくはく
れのりれ一車くるまへにりひくねねく